

犬と人と花

小川未明

青空文庫

ある町まちはずれのさびしい寺てらに、和尚おしょうさまと一ひとぴきの大きな赤あ犬かいぬとが住すんでいました。そのほかには、だれもいなかったのであります。

和尚おしょうさまは、毎日まいにち御堂おどうにいつてお経きようを上げられていました。昼ひるも、夜よるも、あたりは火ひの消きえたように寂然ひっそりとして静しずかでありました。犬いぬもだいぶ年としをとつていました。おとなしい、聞き分わけのある犬いぬで、和尚おしょうさまのいうことはなんでもわかりました。ただ、ものがいえないばかりでありました。

赤犬あかいぬは、毎日まいにち、御堂おどうの上あがり口くちにおとなしく腹はらばいになつて、和尚おしょうさまのあげるお経きようを熱心ねっしんに聞きいていたのであります。

和尚おしょうさまは、どんな日ひでもお勤つとめを怠おこたられたことはありません。
 赤あかいぬ犬ぬも、お経きようのあげられる時じぶん分ぶんには、ちゃんときて、いつもの
 ごとくまぶたほそ瞼ほそを細ほそくして、お経きようこえの声こえを聞きいていました。

お寺てらの境けいだい内ないには、幾いくたびか春はるがきたり、また去さりました。けれど、和尚おしょうさまと犬いぬの生せい活かつには変かわりがなかつたのでありません。

和尚おしょうさまは、ある日ひ赤あかいぬ犬ぬに向むかつて、

「おまえも年としをとった。やがて極ごく楽らくへゆくであろうが、私わたしはいつも仏ほとけさまに向むかつて、今こんど度の世よには、おまえが徳とくのある人にんげん間に生うまか変わかつてくるようにとお願ねがい申もうしている。よく心こころで、仏ほとけさまに、おまえもお願ねがい申もうしておれよ。おそらく、三十ねん年の後のちには、

おまえは、またこの娑婆しゃばに出てくるだろう。」といわれました。

赤犬あかいぬは、和尚おしょうさまの話はなしを聞いて、さもよくわかるようう

なだれて、二つの目めから涙なみだをこぼしていました。

数年すうねんののち後に、和尚おしょうさまも犬いぬも、ついにこの世よを去さってしま

いました。

三十年ねんたち、五十年ねんたち、七十年ねんとたちました。この世よの中なかも

だいぶか変わりました。

ある村むらに一人ひとりのおじいさんがありました。目めの下したに小ちいさな黒子ほくろ

があつて、まるまるとよくふとつていました。歩あるくときは、ちよ

うど豚ぶたの歩あるくようによちよちと歩あるきました。

おじいさんは、かつて怒おこったことがなく、いつもにこにこ笑わら

つて、太い煙管で煙草を喫っていました。そのうえ、おじいさんは、体がふとつていて働けないせいもあるが、怠け者でなんにもしなかつたけれど、けっして食うに困るようなことはありませんでした。

「おじいさん、今年は豆がよくできたから持つてきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、芋を持つてきました。どうか食べてください。」
「おじいさん、なにか不自由なものがあつたら、どうかいつてく
ださい。なんでもしてあげますから。」

いろいろに、村の人々は、おじいさんのところにいつてきました。そうして、おじいさんがもらつてくれるのをたいへんに喜

びましたほど、おじいさんは、みんなから慕したわれていました。

村むらで若い者わかものがけんかをすると、おじいさんは太ふとい煙管きせるをくわえて、よちよちと出でかけてゆきました。みんなは、おじいさんの目めの下の黒子ほくろのある笑顔えがおを見ると、どんなに腹はらがたつつていても急きゆうに和やわらいでしまつて、その笑顔えがおにつりこまれて自分じぶんまで笑わらうのでありました。

また、村むらの人々ひとびとは、どんなに働はたらいて疲つかれているときでも、おじいさんが、そこを通とおりかかつて、

「いいお天気てんきでございます。よく精せいが出るでのう。」と、声こゑをかけられると、人々ひとびとは急きゆうに晴はれ晴ばれした気持きもちになつて、また仕事しごとにとりかかったのであります。

おじいさんは、この村むらでは、なくてはならぬ人ひとになりました。

おじいさんさえいれば、村むらは平和へいわがつづいたのであります。おじいさんは、若者わかものの相手あいてにもなれば、また子供こどもらの相手あいてとなりました。

けれどおじいさんは、べつに富とんではいませんでした。食たべることに困こまらなかつたというまでであります。そうして、乞食こじきや、旅たび人の困こまるものには、なんでも余あまつたものは分わけてやりました。あるときのことです。村人むらびとは、畑はたけから取とれたものを持もつて、

おじいさんの庭にわ先さきへやってまいりました。

「おじいさん、これを食たべてください。」といいました。

いつものごとく、にこにことして煙草たばこを吸すっていたおじいさん

は、その日にかぎって、常よりは元氣なく、

「もう、私は、なんにもいらぬから。」と答えて、軽く頭を振りました。

村人は、どうしたことかと心配でなりませんでした。

その明るく日、おじいさんは気分が悪くなつて床につくと、すやすやと眠るやうに死んでしまいました。いいおじいさんをなくして、村人は悲しみました。そうして、懇ろにおじいさんを葬つて、みんなで法事を営みました。

「ほんとうに、だれからでも慕われた、徳のあるおじいさんだつた。」と、人々はうわさをいたしました。

また、二十年たち、三十年たちました。おじいさんの墓のそば

に植うえた桜さくらの木きは、大おおきくなつて、毎まい年ねんのくる春はるには、いつも雪ゆきの降ふつたように花はなが咲さいたのであります。

ある年としの春はるの長閑のどかな日ひのこと、花はなの下したにあめ売うりが屋台やたいを下おろしていました。屋台やたいに結むすんだ風船ふうせん玉たまは空そらに漂ただよい、また、立たてた小旗こぼたが風かぜに吹ふかれていました。そこへ五つ六つの子供こどもが三、四人にん集あつまつて、あめを買かっていました。

頭あたまの上うへには、花はなが散ちつて、ひらひらと風かぜに舞まっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「黒煙」

1919（大正8）年5月

※表題は底本では、「犬《いぬ》と人《ひと》と花《はな》」
なっています。

入力：ぷろぼの青空作業員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空作業員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬と人と花

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>